

ソクラテスの死についての小論

——プラトン『パイドン』における自殺禁止論をめぐる

小島 和男

はじめに

∴ 肉体は魂を乱し、魂と一緒にいる場合、魂が真実や知を得るのを阻止する… (Pl. *Phd.*: 66A5-7)

と語る『パイドン』の中のソクラテスは、哲学者は死を恐れることはないと主張する。肉体は知を愛し求める哲学者にとつてはいわば牢獄である。死は魂が肉体から解放されることであり、哲学者は知を愛求するものである。つまり哲学者は、魂が肉体から離れ魂そのものになること、いわば「死の練習」⁽¹⁾をしてきたものなのだから、死を恐れることはないのだと言うのだ。

しかし、ここで私は思う。「何でそんな面倒な練習をしなくてはならないのか? とつとと自殺してしまうのでは何がいけないのだろうか?」と。

自殺は魅力的である。この世での面倒くさいことすべてをその場で無にすることができる。一切のことがそこで終わって楽なのである。その上、ソクラテスによれば死ねば肉体から解放されるわけだから、魂そのものとなつて真実を知ることができるようになる。そうか、この世の自分が物分りが悪く、無知なのは肉体とともにあるからなのか。よし、それなら死んで賢くなろう！

先のソクラテスの弁を鵜呑みにすれば、死ぬことは恐れることでもなく、とてもよいことなのだから、早速自殺してみようという気になってくるものもあるかもしれない。ただ、苦痛を伴うかもしれないのがちょっとネックかもしれないが、「真実や知を得る」ことができるのだ！ これはもう死ぬしかない。

しかし、である。ソクラテスは同じ作品の中でこうも言っている。

…さらに、人々にとって死はとてもよいものなのだが、その人々自身が自らにそのよいことを為す（自殺をする）のは敬虔なことではなく、他のものにしてもらうのを待たねばならない… (Pl. Phd. 62A6-7)

どうも自殺はいけならしい。だが、果たしてソクラテスはそれに対して納得のできるような説明を持っているであろうか？ 検証の必要がある。

1 ソクラテスの自殺禁止論

まずはその『パイドン』の中のソクラテスの「自殺禁止論」の箇所を読んでみよう。

ソクラテス最期の日、彼の牢獄にはたくさんさんの友人たちが集まっていた。ソクラテスはそのなかの一人の若者

ケベスに、エウエノス(2)への伝言を頼む。

：それから「さよなら」とエウエノスに伝えてくれたまえ。それともし、思慮があるならば出来るだけすぐに僕のあとを追うように、とね。
(Pl. *Phd.* 61B8-9)

それを聞いたケベスの友人シミアスは驚き、エウエノスはそのような勧めには従わないだろうと言う。そう言うのももつともである。ソクラテスは、エウエノスに「君も早く死にたまえよ」と勧めているわけなのだから。ソクラテスは次にこう言う。

：エウエノスにしろ、他の誰にしろ、この仕事（知を愛すること、哲学）とふさわしく関わっている者は僕の言うことを聞くだろう。だがしかし、おそらく彼は自ら強いこと（自殺）はしないだろう。何故ならそれは許されないことだと人々が言っているから。
(Pl. *Phd.* 61C8-10)

ケベスは尋ねる。

それでは一体どうして、自殺は許されないことだと人々は言っているのですか、ソクラテス。

(Pl. *Phd.* 61E5-6)

ケベスもシミアスもギリシアにおけるピュタゴラス派の中心地テーバイの出身である。いまはこうしてソクラ

テスのそばにいるが、それまではずっとピュタゴラス派の哲学を学んでいた。ピュタゴラス派の師ピロオスも、自殺をするべきではない、と言っていた。しかし、その理由は聞けなかった。自殺が許されないのは何故か、それを聞きたい。いまだ誰からもそのはつきりとした理由は誰も聞いたことがないのだ。

ソクラテスはこう続ける。

…おそらく君には驚くべきことに思われるだろう。人々にとって死は生よりもよいものである、そのことだけは他のすべてとちがって絶対的であり、他のことどものようにある人にとってはたまたまそうだとか、そういう時もあるとかいうことでは決しないのだということが。さらに、人々にとって死はとてつもないものなのだが、その人々自身が自らにそのよいことを為す（自殺をする）のは敬虔なことではなく、他のものにしてもらうのを待たねばならないということも、君にはおそらく驚くべきことに思われるだろう。

(Pl. *Phd.* 62A2-7)

ケベスは呆れる。どうしたって理になっていない。何故、死がよいことならば自殺はいけないのか。やはり死は悪いものではないか？ がっかりしかかる若者たちにソクラテスはこう畳み掛けるように説明する。

…次のことは正しく言われていると僕は思うんだ。神々は僕たちを支配するもので、僕たち人間は神々の所有物の一つにすぎないのだ、ということは。

(Pl. *Phd.* 62B6-8)

…君だって、君自身の所有物のうちのある一つが、君がその死を望むなんていうことを示してもいないの

に、自殺するとしたら、そいつに腹を立てるだろうか？　そして、何らかのかたちで罰することが出来るなら罰するだろうか？

(Pl. Phd. 62C1-4)

：だから、神が、ちようど今僕たちの手元にあるような何らかの必然を、送り込むより先に、自殺してはいけないということは、理にかなっていないことではないのだよ。

(Pl. Phd. 62C6-8)

若者たちはこの論に納得をし、議論はここから、「何故哲学者にとって死はよいものなのか？」という問題に入っていく。

ソクラテスのこの自殺禁止論は当時のギリシア人たちにとっては、二重の意味でも刺激的なものだっただろう。いや、刺激的を通り越して、不可解なものだったに違いない。

というのには、一つは、当時のギリシア人たちの「死」についての考え、イメージをひっくり返し、「死はよいものだ」といつているからである。かれらが「死」に対して、どのようなイメージを抱いていたかについては『オデュッセイア』に大変よくあらわれている。オデュッセウスの冥府行きのくだりである。

テーバイの予言者ティレシアスの亡霊に帰り道を尋ねるために立ち寄った冥府で、オデュッセウスはかつての戦友アキレウスの亡霊と出会う。死者たちの王となつているアキレウスに向かい、死んだって幸せではないか、とのんきに語りかけるオデュッセウス。しかし、アキレウスの返答は次のようなものであった。

勇名高きオデュッセウスよ、私に死の気休めをいうのはやめてくれ。世を去つた死人全員の王となつて君臨するよりも、むしろ地上に在つて、どこかの、土地の割り当ても受けられず、資産の乏しい男にでも備われ

て仕えたい気持ちだ。

(Hom. Od. XI 488-491)

トロイアの英雄、勇者アキレウスが、名誉や栄光を捨てても、そこにいるよりは生きていこうがましだといふ冥府、死。そのアキレウスの言葉から、古代のギリシア人が死に対してものごくネガティブなイメージを抱いていたことは明らかである。

当時のギリシア人たちにとって、あの世、死後の世界、冥府とは、

…なんの感覚もない骸、果敢なくなった人間の幻にすぎぬ者たちの住む場所… (Hom. Od. XI 475-476)

であり、死は非常にわるいものであったのだ。

ソクラテスはそのわるいもののはずの「死」をまったく逆によいものだと言うが、それだけではなく、もう一つ、更にまた不可解なことに、それを自ら為してはならない、自殺はいけない、というのである。そしてその根拠は人間は神々の所有物だからだというのである。

二重の意味で刺激的だったにせよ、そこにいたギリシア人の若者たちには筋のおつた、理にかなった論として納得できた。しかし、そこに、私たち現代人にとっての不可解さがある。現代の日本では神様を信じている人などまばらである。それに信じていたとしても、自分がその神の所有物であると言われてすぐに納得がいくのだろうか？ 少なくとも私は、全然納得ができない。「この世のどこかに、あなたを必要とする人がいるのだから」という、自殺者を思いとどまらせようとして言ってしまう真つ赤な嘘と、同じように聞こえてしまう。「神」なんていわれてもピンとこないし、第一、私は誰のものでもない。私の肉体も命も、他の誰でもなく、この私のも

のだ。私がどうしたって勝手だろう、という理屈はどこが間違っているのだろうか？ ショウペンハウエルも同じようなことを言っている。

2 神からの必然

一体誰にだつて自分自身の体と命についてほど争う余地のない権利を持つるものは他には何もないのだということは明らかではないか？

(Schopenhauer, A., *Parerga und Paralipomena II* Kap. 13. Über den Selbstmord)

と語るショウペンハウエルは、そのあと、自殺が犯罪の一種に数えられているのはおかしいとし、古代ローマの博物学者プリニウスの「自殺は人間に与えられた神からの贈り物」という言葉や、後期ギリシアの著作家ストバイオスの「必要が迫れば生命を放棄するべきだ」という言葉を引き、更にストア派においては自殺は英雄的な行為だとして賞賛されていると語る⁽³⁾。

そのストア派の自殺は有名であるが、中でも特に有名なのは、ショウペンハウエルも言っているように皇帝ネロの暴政の犠牲となつたセネカであろう。紀元六五年、謀反の廉で告発されたセネカは、これまでの功績を考慮され、自殺を許された。遺言状を書きにかかったセネカは、そのようなことをしている時間はないと言われてしまう。意を決したセネカは、自分で自分の血管を切り裂き、血を流れるにまかせ、秘書を呼んで書き取っておくように言うのと、今はの際のその瞬間まで、悠々と熱弁をふるつたという。その最期はタキトゥスの『年代記』に詳しく描かれているが⁽⁴⁾、それは『パイドン』におけるソクラテスの最期になぞらえて書かれたもので

あつたと言われている。

「なぞらえた」ということは、ソクラテスの最期は自殺だと、考えられていたのだろうか？ しかし、それはおかしなことである。ソクラテスは先の「自殺禁止論」を語っているのだから。確かにソクラテスは脱獄の勧めを拒否して牢獄にとどまり、従容と自ら毒杯を仰いで命を絶つた。とはいえ、あくまでもそれは刑死である。では、セネカのそれも刑死と考えればよいのだろうか？ おそらくそうだろう。セネカだって死にたくて死んだわけではない。皇帝ネロに自殺を強いられたのである。

しかし、では再び戻って、ソクラテスはどうだったのか？ 確かに自殺ではなく刑死ではあるが、どうもソクラテスの四大福音書と呼ばれているプラトンの作品の中の、『ソクラテスの弁明』・『クリトン』・『パイドン』というソクラテスの死に至るまでを描いた三作品⑤を讀んでいると「死にたくて死んだわけではない」とはいえないような気がしてくるのである。

まずは死刑にいたるまでの経過が問題である。その経過は『ソクラテスの弁明』に詳しい。

当時のアテナイの裁判では、裁判官である聴衆⑥の投票によって有罪かどうか、そして有罪だったときにはその刑罰が決められる。有罪となった場合は、量刑のための二度目の投票が行われる前に、告発者と、被告人が、それぞれふさわしい刑を提案し、そのどちらかに投票するという仕組みになっているわけである。ソクラテスの場合、一回目の投票で有罪とされた後、告発者であるメレトスは、ソクラテスの刑罰として、死刑を求刑した。それに対し、ソクラテスは何を自分にふさわしい刑として提案したかという、何と迎賓館での食事なのである。

…もし私が、正義に従ってふさわしい量刑を申し出るべきならば、私はそれを刑罰として要求します。迎賓

館での食事を。

(Pl. Ap. 36E10-37A2)

とのソクラテスの言葉は、どんなに聴衆であるアテナイ人たちの反感を買ったことであろう。大体、迎賓館での食事というのは刑罰にはなりえないだろう。しかもただの豪華な食事なのではない。オリンピック祭の優勝選手や高名な將軍などだけが与れる大変に名譽なことなのである。「罰として名譽をくれ」そんな倒錯したことを言っているようにも聞こえたセリフだったろう。

その反感は正に二回目の投票にあらわれた。友人たちのとりなしもあって結局は三〇ムナヘという大金の罰金を支払うことを求刑して臨んだ二回目の投票で、ソクラテスは死刑の判決を受けたのである。一回目の投票でソクラテスは僅差⁸⁾で有罪となったということなので、二回目の量刑ではより軽い刑のほうに決まるのが自然だろうが、実に重い、死刑という結果になってしまった。どう考えても、先の発言でアテナイ人たちを挑発して、その結果死刑となったようにしか思えないのである。

次に問題なのが獄中で死刑執行の日を待つソクラテスである。それは『クリトン』に詳しい。

デロス島のアポロン神殿へと祭礼の船が往復する間はアテナイでは死刑を行わないことになっていた。ソクラテスの場合、裁判の前日に船がアテナイを出発していたため、彼の死刑は船が帰ってくるまで延期され、その間ソクラテスはずっと牢獄にいたことになった。帰りの船は逆風などの影響もあって遅れに遅れ、ソクラテスは牢獄で三〇日間も過ごすことになったのだが、その間、ソクラテスはずっと友人たちから脱獄の勧めを受けていたにもかかわらず、決して脱獄しようとはしなかったのである。死刑前日のクリトンの必死の説得にも心を動かさず、死刑の日を迎えたソクラテス。彼は助かることができたにもかかわらず、助からなかったのである。

また、『パイドン』におけるソクラテスも、

…人々にとって死は生よりもよいものである、そのことだけは他のすべてとちがつて絶対的であり、他のことどものようにある人にとってはたまたまそうだとか、そういう時もあるとかいうことでは決してないのだ

…

(Pl. Phd. 62A2-5)

と言つて、死後の世界に希望をもち、魂は不死であるということを語りつづける。

ソクラテスはどうしても死にたくなかったというわけではないことは明白である。だがしかし、このソクラテスの「余裕」はなんだろうか？ 死を迎えて、平然とそれを受け入れるその「余裕」。セネカとは少しちがうように思われるある種の「余裕」。

それは、先にあげた引用でも言われているように、

…ちようど今僕たちの手元にあるような何らかの必然…

(Pl. Phd. 62C7-8)

である。「神からの必然」が、あるが故なのだろうか？

だとしたらその「神からの必然」とは何なのか？

しかし、人が死ぬのは、少なくともその人にとっては大いなる「必然」の故にといつてしまつてはならないの
 だろうか？ それが神からのかどうかは別にして、先のように自殺が魅力的だから、死ぬと楽になれるから死を
 選ぶ人だつて、少なくともその人にとっては「必然」的に選んだものなのだといつてしまつてはいけないのだろ
 うか？ 自殺をしようとしている人は、「苦しくて死ぬしかない、この苦しみはあなたにはわからない、私にと
 つては死ぬしかない」と言はずなのだ。

とすると、ソクラテスのいう「神からの必然」が問題になる(9)。「神からの必然」によるものならば自殺をしてもそれはソクラテスの禁ずるところの自殺にはならないのではないだろうか？ とすると、ソクラテスの流れからいっても、「してもよい自殺」があってもいいのかもしれない。だとしたらそれはどういった自殺なのだろうか？ そしてそれを導く「神からの必然」とはどのようなものなのだろうか？ 考えていきたい(10)。

3 理にかなった自殺

ストアの断片には、人生を宴会に喩えて、理にかなった自殺について説明しているものがある(11)。
宴会を終わらせる五つの理由、

- ① 突然友人が近くにきたから
- ② 傍若無人な連中がやってきたから
- ③ 酩酊してしまったから
- ④ 食事が冷めてしまったから
- ⑤ 食事がなくなったから

それらに喩えて自殺の五つの理由をあげる。

- ① 祖国を守るため
- ② 秘密を言うことを迫られて
- ③ 肉体が衰えたので
- ④ 肉体が不治の病などにとらえられ魂をこれ以上よくすることが不可能になったから

⑤ 善き人々からこれ以上よいものを受け取れなくなったから

どうなぞらえていることになつてゐるのかという細かいことはここでは問題ではない。正直なところを言えば、もとのテクストにもそのわけが詳しく書いていない為もあつて、私にはよく分からないのだ。だが、とにかくここで重要なのは、④と⑤にあらわれているような、現世ではこれ以上魂をよくすることが出来なくなったからという理由である。とすると、ストアの人々にとつての自殺がみとめられる「神からの必然」とは、「これ以上現世においては魂を善くするということができない状況」を指すことになるだろう。だからといって、足の指を折つただけで、最期を悟り、息を止めて自殺したストア派の創始者ゼノンのその行為¹²が、「神からの必然」によるものかどうかについては甚だ疑問が残るわけではあるが。

次に、新プラトン主義者のプロティノスの I 9⁽¹³⁾から見ていきたい。この小品は、ポルピュリオス¹⁴によつて、「理にかなつた自殺について」もしくは、「生からの理にかなつた脱出について」という題名がつけられていた作品である。

そのなかでプロティノスは、無理やり自殺をして、魂を肉体から引き離そうとしても、そのようなやり方は、魂は肉体に束縛されていたときの様々なパトスから離れることはできないのだと説き、自殺を禁じている。しかし、自分が正気を失つていつてゐることに気付く時は、

…それ（自殺）を必然的なものうちのひとつとして、無条件に選ばれるべきものではなく、状況によつては選ばれるべきものの一つとして、引き受けるであろう。
(Plot. *Enn.* 19,12-14)

と言つてゐる。とすると、プロティノスにとつては、「正気を失うこと」が自殺するべき「必然」に結びついて

いることになる。

この「正気を失うこと」とはどういうことだろうか。ギリシア語では、*Apheiv [erein]* という動詞の不定詞形であるが、これは「愚かになること」を表す。ここではただ単に「愚かになる」ということではなく、「(病気などの原因で) 頭がおかしくなり、正気を失っていく」というような事態を表していると言っているだろう。「(病気などの原因で) 頭がおかしくなり、正気を失っていく」とどのようなことになるのか？ プロティノスの思想では、哲学者は理性を用いて、魂を肉体から解放しつつ善を観照していなければいけないのである。常にそのような魂の肉体からの浄化にいそまなくてはならないのである。しかし、先のような「(病気などの原因で) 頭がおかしくなり、正気を失っていく」状態にあるとそれができなくなってしまう。故にそのような場合は自殺をして、無理やりにも魂を肉体から切り離さなくてはならないかと思われる。

4 魂と肉体

また、プロティノスよりも後代の新プラトン主義者オリュンピオドロスは、『パイドン』の注釈書を書いており、その中でこのように言っている。

…肉体のため故(だけ)にそのような自分自身の解放(自殺)はしてはならない。というのは、それは(魂ではなく)肉体にとつての悪いことから逃れるため(にしかならない)なるだから。しかし、魂に寄与する、より大きな善のためには、自分自身の解放(自殺)は正当であるのだ。(Olymp. In *Phd.* 92-4)

魂のための自殺なら許されるとここではいわれているわけだが、そもそも今私の考えているところの自殺は、魂のためではないのだろうか？ という疑問が出てくる。牢獄である肉体から離れて、本当の自分自身である魂そのものとなり、真実や知を得るのは、正にその魂のためなのではないだろうか？

だがしかし、もし本当にばつと自殺をしさえすれば、真実や知を得られるのだとしたら、誰も現世で哲学などしはしないだろう。知を愛するという行為、すなわち哲学に目覚め、真実や知を得ようとした者は、みな次々と自殺をしてゆき、この世からいなくなってしまう。それならそれで何の不都合も生じないような気がしないでもないが、この現世で哲学をする意味はどこにあるのか？

それについてはオリュンピオドロスが考えてくれている。

：もし神が、魂を向上させる力と先慮の力の二つの力を持っていて、二次的なものどもを先慮する力が、自分自身に戻つてくることで魂を向上させる力を妨げないで、同時に二つの力を働かせながら、神はその活動をしているのだとしたら、その場合、神に類似している哲学者も（というのは哲学は神に似ることだから）生成に関与しつつ、二次的なものどもを先慮しつつ、同時に、浄化もしながらその活動をするのを妨げるものはないのだ。というのは、死の後で肉体から分離した魂が、浄化のうちに生きるのは、全然大変なことではないが、肉体にとらわれながらも浄化に努めるのは、高貴なことだからである。

(Olymp. In Phd. 2,3-10)

神の持っている二つの力というのは、魂を向上させる力と、魂ではないほかのことども（二次的なものども）のことを考える力のことである。「哲学が神に似ることだ」というのは、哲学は知を愛することであり、ソクラ

テスによれば神は完璧な知者なのだからその対比を考えると納得がいくだろう。その神に似るべく努力している哲学者の魂の力にも二つある。その二つとはもちろん、魂の浄化に努める力と、二次的なことであるこの世の諸々の出来事、もちろんそれは我々が肉体をとまなつてこの世にいるが故にかかわつてしまふ出来事なわけだが、そういったことどもを考ふる力のことである。本当のところその二つの力は妨げあうようなものではないのだ。逆に、「肉体にとらわれながらも浄化に努めるのが高貴なことだ」というように、肉体の中にいるからこそ、諸々の苦難があり、現世での色々な出来事にもまれ、また肉体ゆえの様々な欲望に打ち勝つことによつて、魂それ自体が向上できるのだ……ということをおリユンピオドロスは言っているのではないだろうか？

また、こうもおリユンピオドロスは言っている。

∴自発的な束縛は、自発的に解放するべきであり、非自発的な束縛は非自発的な解放でもつてとかれるべきなのであり、それを混同してはいけない。実際、肉体の生は非自発的であり、肉体の死という非自発的な解放でもつて解かれるべきだが、意志がともなつた生、我々が目的に沿つて選んだところの生は、自発的な解放である浄化でもつて解かれるべきなのだ。

(Olymp. In Phid. 2.17-20)

ここで言われている「自発的な解放」とは自殺のことではない。哲学による魂の浄化のことである。自殺はむしろ「非自発的な解放」の方に入る。ここで言われているのは、二つの生の対比である。一つはこの世の誰も享受している普通の肉体の生、これが非自発的な生である。通常は自分で選んだわけではなく、気が付いたらこの世界に産み落とされていたわけなのだから「非自発的」と言われている。もう一つは哲学者の生、魂が浄化を求め、真実や知を得ようとするその魂の生のことである。それが「意志がともなつた生」と呼ばれているのは、そ

れを哲学者である「我々が目的に沿って選んだところの生」だからである。二つの生について、前者は肉体を主とした生、後者は魂を主とした生というように区別することもできる。そうすると、「非自発的な解放」である自殺はあくまでもその肉体の側から魂を解放しようとする行為であり、それでは先の二つの生が「混同」されてしまっているとオリュンピオド罗斯は言いたいのである。あくまでも魂を主とした生ならば、魂から魂の力で、「自発的に解放」するべきなのであり、つまりは哲学という浄化によって解放しなくてはならないのだ、ということを行っているのだと思われる。

つまり、真実や知を得ようと思つて簡単に肉体を切り捨ててしまうような魂には、そのようなよいものは得られないということがいいたいのではないのだろうか？　いくら肉体という牢獄から抜け出し、魂そのものになったとしても、その魂がたいして向上もしていない、粗野で程度の低い魂だったらどうだろうか？

∴（無理に自殺をし、生から）解き放つた場合は、魂は（肉体に束縛されていたときの）様々な情念から離れることができず、不快さ、苦痛、怒りがあるのだ。
(Plot. *Enn.* 19,9-10)

と、プロティノスもいうように、決してすぐに真実や知が得られるようになるわけではないのではなからうか？　さらにプロティノスは19をこう結んでいる。

∴そしてもし、肉体から出て行く（その時の）それぞれの人の状態に応じてあの世の持ち場を得るのだとしたら、更なる（魂の）向上（の可能性）があるのに（魂をあの世に、急いで）連れ出してはいけないのだ。

(Plot. *Enn.* 19,17-19)

そのように考えると、先にあげた許される自殺、理になつた自殺の可能性も分かりやすくなるだろう。正に先のストア派の喩えにあつたように、この世にいてはもうこれ以上魂をよくすることはできない、哲学という魂浄化の道を遂行することはできず、あるうことかここで死を選ばなければそれに反することになってしまう(15)：というそのような状況のときには、傍目には自殺に見えたとしても、そういつた状況そのものが「神からの必然」であると考えて死を選ばなければならぬのである。ソクラテスもやはりセネカと同じく、死にたくて死んだわけではないのだろう。哲学という、魂浄化の道を遂行するにあつて、つまりはよりよく、より正しく生きるには、ああするしかなかつたのであり、結果として死がきてしまつただけのことなのだ。ソクラテスにとつて肉体の死は魂が汚れることに比べればたいしたことではないのだ。死は、結果として魂の肉体からの解放である。生涯をそうすること、魂を解放することの練習である哲学に費やしてきたソクラテスにとつては(自分から無理に選ぶことはならないにしても)待ちに待つたものでもあつたのであり、ソクラテスは十分に練習を積み重ねてきていたから余裕だつたのである。

おわりに

つまりは、勝手な自殺がいけないのは、何事も練習をろくすっぽししないで本番に臨んでも上手いかないのと同じで、時間がある限り練習を続けて、本番に備えなければならぬからなのである。練習を十分にしていないうちにその本番に臨んだつて上手くいくはずがない。自殺はまさしくそのように練習をすつ飛ばして本番に臨んでしまう行為なのだ。本番である死、それは誰にだつてやつてくる。五〇年後かもしれない、明日かもしれない、ひよつとすると一時間後かもしれない。それまでの時間、生きている時間はその本番である死、魂の肉体か

らの解放のための練習時間なのである。もちろん、練習ができず、それどころかそのままでの練習さえも無意味になってしまうような状況が訪れるのでない限りは貴重な練習時間を十分に活用しなければならぬ。

「私は誰のものでもない。私の肉体も命も、他の誰でもなく、この私のものだ。私がどうしたって勝手だろう」という理屈は確かに間違っているではない。しかしもし、あなたが本当に「真実や知を得る」ことを欲しているのだとしたら、自殺したってそれらは得られないのだ。本当にそれらを得るつもりならば来たるべきそのときに向かって、そのときがいつ来ても慌てないように、日頃から「死の練習」をできる限り続けていなければならぬのである。

そしてそのときが誰の身にもやってくることは何よりも確実なことなのだ。

文献表

- Duke, E. A. et al., *Platonis Opera I*, Oxford University Press, 1995. (Oxford Classical Texts)
- Henry, P. et Schwyzler, H.-R., *Platini Opera I*, Oxford University Press, 1964. (Oxford Classical Texts)
- Murray, A. T. (tr.), *Homer : the Odyssey I*, Harvard University Press, 1919. (Loeb Classical Library)
- Jackson, John. (tr.), *Tacitus : the Annals Books XIII-XVI*, Harvard University Press, 1937. (Loeb Classical Library)
- Hicks, R. D. (tr.), *Diogenes Laertius II*, Harvard University Press, 1925. (Loeb Classical Library)
- Arnim, H. von (Hrsg.), *Stoicorum veterum fragmenta III, Chrysippi fragmenta moralia. Fragmenta successorum*

Chrysippi, B. G. Teubner, Stuttgart, 1964.

• Schopenhauer, A., *Parerga und Paralipomena II, Kleine philosophische Schriften. (Samtliche Werke, 5)*, Suhrkamp, Ffm., 1996.

• Westerink, L. G. (ed.), *The Greek Commentaries on Plato's Phaedo: Olympiodorus*, North-Holland Publishing Company, 1976.

[注]

- (1) 『パイドン』67E 参照。
- (2) パロス島出身のソフィスト、弁論家であり、詩人でもあったらしい人物。プラトンの作品中では、『ソクラテスの弁明』50B 及び、『パイドロス』267A で言及されている。
- (3) かくいうショウベンハウエルも、この「自殺について」及び、「意志と表象としての世界」において、自殺に反対する唯一の倫理的な根拠を挙げており、それは「自殺はこの悲しみの世界からの本当の救いの手の代わりには、ただの仮象の救いの手を差し伸べることで、最高の倫理的目標への到達を妨げることになるのだ。」ということらしい。その根拠は本論文の結論に大いに通じるものであると思われる。
- (4) セネカの死は第一五巻の六二〜六三章に詳しい。
- (5) もう一つは『饗宴』。
- (6) 裁判を傍聴している市民全員が、いまで言うところの陪審員のような役割をしていた。
- (7) 一ムナは、百ドラクマ。一ドラクマは職人の約一日分の給料に相当するらしい。職人一日分の給料を一万円と

すると、三千万円ということになる。その半分と見てもかなりの大金であることに変わりはない。

(8) ソクラテスは36Aで、「三〇票でも反対のほうに行っていたら多分私は無罪となっていただろう」と言っている。

(9) 一般に人に死をもたらす「神からの必然」には勿論自然死やそれに近いかたちでの死も含まれるだろうが、ここで私が問題にしたいのはそれではない。

(10) ここで本論の流れとはあまり関係がないかもしれないが、「自殺」および「必然」について語彙的な補足をおきたい。問題となっている自殺は『パイドン』の中ではギリシア語で二つの言われ方がされている。一つは *αὐτὸν ἑαυτοῦ ἀποκτείνουα* [auton heauton apokteinunai] (61E5 など) であり、これは文字通り「自分で自分を殺すこと（＝自殺）」なのであるが、もう一つ、実はソクラテスはこの言い方を最初にするのであるが、 *βιάζεταί αὐτὸν* [biazetai hauton] (61C9 など) というのがある。これは文字通りに訳すと（本テキストでは否定詞がついているが）「自ら強いるだろう」であり、何を強いるのかといえば文脈上、「死ぬ」とか（エウエノスがソクラテスの）後を追う「だとかいうことになるわけだ。が、ここで *βιάζω* [biazo] (*βιάζεταί* [biazetai] の原型) という動詞がわざわざ使われているところが興味深い。英語で言えば force や constrain という意味である。非常に強い無理やりな力に強いられることを表す。しかし「自らに強いる」というのは、「己に克つ」と同じように謎めいた言い方でもある。強いるのも自分であり、強いられるのも自分である。自分が強いて いるということは自分がその行為を自分にさせたいということであり、結果、自分はその行為をしたいということになる。他方、自分が強いられるということは、本当のところその行為をしたくないということが含意されている。したいのであれば強いる必要はないからである。「したいのにしたくない」そんな矛盾がその表現には含まれているようにも感じられる。他方、「神からの必然」の必然は *ἀνάγκη* [anankē] という名詞であり、運命、自然法則、ひいては通常 *λόγος* [logos] という言

葉がが表すような自然の理（ことわり）をもその語義中に含む。ソクラテスにとって、彼が禁ずるところの自殺はそんな理にそむく、無理やりな矛盾した行為だったのかもしれない。ちなみに「己に克つ」についてはプラトン『国家』第四巻430E～B参照のこと。

- (11) SVF III 768 (*Stoicorum veterum fragmenta* III 768 『ストア派断片集』第三巻断片七六八)
- (12) DL VII.1.28 (ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第七巻第一章二八) 参照。
- (13) プロティノスの著作はすべて『エネアデス』にまとめられており、その中の作品の分類番号。
- (14) プロティノスの弟子で、師の死後、その著作を編集した人物。
- (15) ソクラテスの場合、どうしてそうなのかは『クリトン』に詳しい。

※ 引用書名を表した略号は『Liddell&Scott Greek-English Lexicon, Oxford』による。